論文審査の要旨

報告番号	総研第 481号	学位申請者	齊之平 真弓
審査委員	主査 浅川 明弘	学位	博士（医学）
	副査 佐野 輝	副査	黒野 祐一
	副査 下堂薗 恵	副査	中尾 久美子

Quantitative analysis of factors related to anxiety and depression in patients with retinitis pigmentosa

（網膜色素変性患者における不安およびうつに関連する要因の定量分析）

網膜色素変性（RP）は進行性の遺伝性網膜変性疾患で有効な治療法がなく、患者の精神的負担が考えられる。我々はRP患者において不安およびうつに関連する要因を定量的に分析した。

多施設共同横断研究で、対象は2015年8月から2017年2月の間に受診したRP患者112例（男性46例、女性66例、平均年齢60.7±15.4歳）。不安およびうつ評価にはHospital Anxiety and Depression Scale（HADS）質問票にて、HADS-Anxiety（HADS-A）およびHADS-Depression（HADS-D）スコア分布を調査し、視力良好眼・不良眼のlog MAR視力、Functional Vision Score（FVS）、Functional Acuity Score（FAS）、Functional Field Score（FFS）および視覚関連QOL調査にはThe National Eye Institute Visual Function Questionnaire25（VFQ-25）を使用し、それらの相関をSpearman's correlationにて検討した。更に、社会経済要因（罹病期間、重病の既往、家族構成、社会支援、親族の死亡、就労、ロービジョンケア経験、日本網膜色素変性症協会［JRPS］会員）について、HADS-A / HADS-Dスコアに差があるかをMann-Whitney U testにて検討した。

その結果、本研究で以下の知見が明らかになった。

① 全対象において不安は37%、うつは26%にみられた。

② HADS-Aスコアは視機能と相関はなく、VFQ-25の全体的健康観と役割機能と相関があった。

③ HADS-Dスコアはすべての視機能およびVFQ-25のすべてのサブスコアと有意な相関があった。

④ JRPS会員で有意にHADS-Aが高く、就労でHADS-Dが低かった。

RP患者の不安には全体的健康観や役割機能およびJRPS会員である事が関連しており、うつには、視機能および視覚関連QOLの低下、就労が関連していることが明らかになった。

本研究はこれまで評価できなかったRP患者の精神的負担、不安とうつに関連する要因を定量的に分析し、RP患者において眼科学的所見だけでなく心理所見にも配慮した日常診療が必要であることが示唆された点で非常に興味深い。よって本研究は学位論文として十分な価値を有するものと判定した。